

# 子どものスポーツ参加における大学生の役割について ～地域貢献のあり方と教育効果～

1190539 真門 莉那  
高知工科大学経済・マネジメント学群

## はじめに

2020年東京オリンピックの開催が決まり、日本中が活気溢れる時代となってきた。最近では、様々な競技において若手選手が活躍しているのが目にかかるようになってきており。その中の選手たちは幼い頃からスポーツを始める人が多く、将来有望な選手になるためのトレーニングを日々重ねている。

しかし、子どもの体力・運動能力は1985年ころから現在まで低下傾向が続いていて、科学技術の発展、経済の発展で生活が便利になったり、生活様式が変化するなど、子どもの生活全体が歩いたり、外で遊んだりするなどの日常的な身体運動が減少する方向に変化した。また、運動する子どもとしない子どもの二極化が指摘されており、幼い頃からスポーツ競技をするというよりは、身体を動かす頃の楽しさを子どもに理解させることで、成長した時によりスポーツに馴染みやすくなるのではないだろうか。

私自身幼い頃からスポーツを始め、大学生までの経験を通して礼儀やコミュニケーション、団体行動力、忍耐力などの基盤を小さな頃に身につけたものが多いと感じることがあった。しかし、現在子どもの運動能力が問題となっており、もっと子どもの頃からスポーツに触れ合う機会があったらいいのではないかと考えるようになった。大学生活の中で、部活動が生活の中心を占める中で、スポーツを通して大学生だからこそできることがあるのではないかと考えていた。

具体的には、スポーツにおける地域貢献だ。毎日の部活動だけでは、マンネリ化によって練習が刺激のないものと化すことがあるが、スポーツボランティアとして地域と連携することができる。そして、子どもの指導者として模擬体験やスポーツならではの、楽しさや本質を感じることができ、日頃

の練習のマンネリを防ぐことができるのではないかと考えた。

「学生アスリートにおけるキャリア教育の一考察～高知工科大学のアスリート教育の在り方とは～」（2016・濱崎）の論文においても、アスリート教育のために地域スポーツに参加するというものがある。学生アスリートたちが実際に指導者となってみることで、普段教わる視点が教える視点に変化した時に普段の指導者の気持ちを理解するきっかけにもなりうるであろう。

以下、第一章では、現在の子どものスポーツ参加の現状を詳しく調査していくとともに、全日本こどもスポーツ連盟「チャレンジキッズ」と高知県で行われている「高知くろしおキッズ」を比較し考察を行う。次いで第二章では、チャレンジキッズの成功事例に基づきどのように高知県の子どものスポーツ振興に取り入れることができるのか、そして最終的には一人の大学生として、どのようにスポーツで地域に貢献していけるのかを模索していくことを本研究の目的とする。

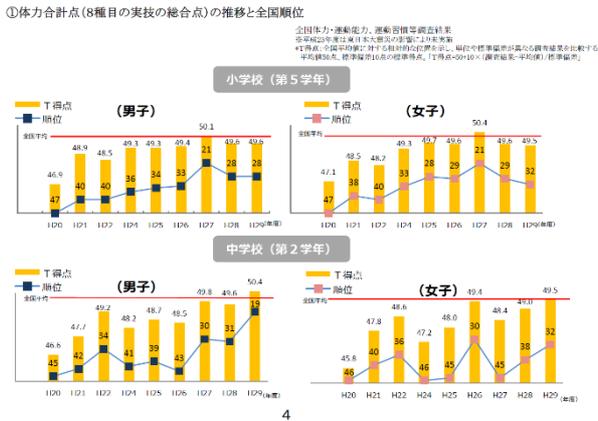
## 第1章 現在の子どものスポーツ参加の現状

### 第1節 高知県における子どもスポーツの現状と課題

現在、高知県で行われている主な取り組みとして、①幼児期の遊びを通じた運動機会の充実、②学校の体育授業及び体育活動等の充実、③ジュニアスポーツ指導者の指導力の向上、④運動部活動の充実が挙げられている。

下記の図1は、①体力合計点（8種目の実技の総合点）の推移と全国順位を表したものであり、平成20～29年度までの結果を比べてみると、小学校5年生においても、中学校2年生においても上昇傾向にあることが分かる。

図1 ①体力合計点（8種目の実技の総合点）の推移と全国順位



(出所:第2期高知県スポーツ推進計画 Ver 1 より)

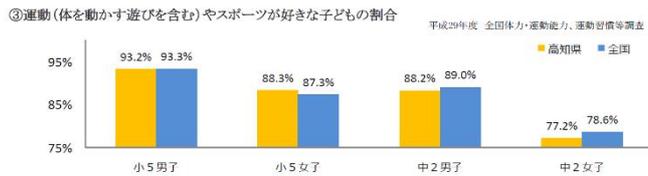
図2 1週間の総運動時間が60分未満の児童生徒の割合



(出所:第2期高知県スポーツ推進計画 Ver 1 より)

また、図2は1週間の総運動時間が60分未満の児童生徒の割合を表したものと、図3では、運動(体を動かす遊びを含む)やスポーツが好きな子どもの割合を表したものである。グラフ②では、全国平均よりも総運動時間が少ないことが見て分かる。

図3 運動(体を動かす遊びを含む)やスポーツが好きな子どもの割合



(出所:第2期高知県スポーツ推進計画 Ver 1 より)

図3でもスポーツが好きな子どもの割合は少し前項平均を下

回っているというような現状であることが分かる。

スポーツ推進計画により、高知県の子どもの体力は全体的に上昇傾向にあり、ほぼ全国水準まで達してきていること、運動が好きな子どもの割合が増加してきていること、体育・保険の授業が楽しいと思う児童生徒の割合が約8割から9割となり、全国平均と同程度になってきていることなどが挙げられる。上記のことがあげられている上でこれからの課題としては、幼児期における運動遊びの重要性について理解啓発をさらに強化し、運動遊びの実践の広がりにつなげる必要があること、子どもたちの運動習慣が十分に定着してないこと、子どもたちの体力はほぼ全国水準に達しているが、生涯を通じたスポーツ活動の土台となる子どもの体力をさらに高める必要があること、学校の運動部活動や地域のスポーツクラブに加入している子どもの割合が全国平均よりも低いこと、学校の教員やジュニアスポーツ指導者など、子どもたちに運動やスポーツを指導する指導者には様々な配慮が求められるが、そうしたことを学ぶ機会がないことが挙げられている。その中でも、私は子どもたちの運動習慣が十分に定着していないことと、学校の運動部活動や地域のスポーツクラブに加入している子どもの割合が低いことに着目した。というのは、図1を見れば分かるように高知県の子どもの体力は上昇傾向にあり、ほぼ全国水準まで達していることが分かる。しかしながら、図2では、全国平均よりも、1週間の総運動時間が60分未満の児童生徒の割合は多い。ということは、スポーツの習い事をしている生徒が全国よりも割合が低いということを表していると言ってもいいだろう。学校の授業のほかにスポーツを行っている児童が少ないためこのような結果になっていると考えられる。中学校に入学してから運動部に入るのではなく、小学校の頃からスポーツクラブに入っていれば、小学生の総運動時間が60分未満の児童割合は減るだろうし、小学校の頃から始めたスポーツであれば、中学校になっても同じスポーツを続ける人がほとんどではないだろうか。幼い頃からスポーツに気軽に触れ合える環境があれば、子どもたちの運動習慣が早くから身に付くことができ、さらにスポーツ

クラブの加入率も上がると考えたからだ。

## 第2節 全日本こどもスポーツ連盟「チャレンジキッズ」の特徴と取り組みについて

全日本こどもスポーツ連盟「チャレンジキッズ」では、地域の子どもたちを対象としたスポーツイベントを実施しており、大学や公共のグラウンドや体育館を使い、さまざまなスポーツを体験できる機会を創出している。また大学を巻き込むことで学生たちにスタッフとしての経験の場を提供している。特徴としては、①健康増進、②交流促進、③普及活動、④地域振興、⑤人材育成としている。イベント内容の企画、指導員のコーディネート、用具・備品の手配、集客サポート、当日の運営など、イベント全般にわたってコンテンツの提供が可能でニーズに合わせてサポートしてくれるのが一般社団法人の全日本こどもスポーツ連盟である。

<事例1> JACS チャレンジキッズ 2015@大阪学院大学  
対象・・・大阪在住の小学生とその保護者

定員・・・100人

参加費・・・1人500円（保険料を含む）

種目・・・サッカー、バレーボール、フラッグフットボール、  
テニス、ドッジボール

<事例2> JACS チャレンジキッズ 2016@大阪商業大学  
対象、定員、参加費は上記と同様

種目・・・野球、サッカー、バスケットボール、バレーボール、  
空手

<事例2>について詳しく述べると、野球は大阪商業大学の硬式野球部のレギュラーメンバーで関西六大学野球のリーグ戦で首位打者や大会 MVP 等に選ばれるなど、卒業後は全員が社会人野球に進む5人が指導スタッフを務め、サッカーは大阪商業大学サッカー部監督の中野尊志氏と部員の学生が務め、大学在学中の部員がスタッフとなり、子どもたちとスポーツを楽しんだ。

全日本こどもスポーツ連盟では、「チャレンジキッズ」の他にも地域振興を主な目的とし、地域に応じたスポーツイベン

トをプロデュースする「スポーツマジック」やボールを使った総合的な運動プログラム「ボールメソッド」、青少年育成に関わる指導者や関係者向けにスポーツ関わる講演を行なう「スポーツアカデミー」の事業がある。

## 第3節 高知県パスウェイシステム事業「くろしおキッズ」の取り組みについて

この事業は、「第二期高知県スポーツ推進計画」の施策の一つとして行なわれている。県内の優れたジュニア選手を発掘（「見つける」）し、組織的に継続した指導（「育てる」）と適性の検証（「活かす」）を行うことにより、将来、オリンピックをはじめ、世界の檜舞台で活躍する選手を育てるとともに能力の可能性を最大限に広げることを目指している事業である。

くろしおキッズの育成プログラムはトップアスリートに求められる資質・能力を育成していく通常プログラムや、他県のタレント発掘事業との交流やオリンピックやトップアスリートによる試合観戦等を行う特別プログラム、宿泊を伴い日常の活動では行わないプログラムの実施をする夏季合宿プログラムや、栄養やスポーツ障害の予防等についての学習を行う保護者プログラムもあり、子どもだけではなく保護者も一緒になって学ぶ機会が設けられている。くろしおキッズの他にも「わいわいチャレンジ！」というプログラムもあり、高知県の小学校3年生～6年生を対象にして様々なスポーツを経験してもらうようなプログラムもある。

## 第2章 高知県スポーツの課題と解決策

### 第1節 高知県文化スポーツ部スポーツ課でのヒアリング

高知県の子どもスポーツの現状と課題を調査すべく、高知県庁の高知県文化スポーツ部スポーツ課で育成強化サポート担当の福留さんに話を伺うことができた。メジャーなスポーツも然ることながらなかなか普段触れ合うことのないようなスポーツもチャレンジキッズの競技種目に入っていることか



うとすることの難しさや楽しさを学ぶことができ、今後に活かすことができたという。

今回のA氏のヒアリングによって、今までは、常に教えられる側に立っていたのでいかに簡単に分かりやすく教えることが難しいことなのかを子どもたちを教育することで指導者の大変さを実感することができるのではないだろうかとは私は考えた。さらに、指導者側の気持ちと教えられる側の気持ちを両方理解することによって、自分自身のさらなる成長に繋げることができているようである。

### 第3節 くろしおキッズに本学が参加するメリット

本学のスポーツマネジメント専攻の講義を通して、座学はとても充実していると思うが、その学んだことを実際に実践する機会は、講義の中では少ない。もっと、外での活動を通して実践する機会があると、座学で学んだことがさらに身に付くのではないかと考えられる。ここからは、先行研究である「学生アスリートによるキャリア教育の一考察～高知工科大学のアスリート教育の在り方～」（濱崎・2017）を参考にしながら私が本学で必要だと考える取り組みについて提案したい。

スポーツマネジメント専攻の意義は、「大学のスポーツ分野で高度な業績を修めつつ、経営学・経済学の基本的な知識に加えてスポーツマネジメントの専門知識を習得することで、スポーツビジネスの分野で求められるマネジメントスキルを持つ人材が育つこと」を目標としている。マネジメントの基本的な科目に加えて、スポーツ経営学やスポーツマーケティング、スポーツ行政論など、スポーツマネジメントに関する専門科目を習得することができる。

私は、基本的な知識理解を深めると共に充実した課外授業が本学をさらに大学内だけでなく県の行政とも協力し合って地域貢献に繋がるのではないかと考える。

#### （1）講義内での課外活動を取り入れる

スポーツマネジメント専攻の講義の基本的な進め方は、教授作成のレジュメを基に、話を聞き、グループワークを行う

ものが多い。グループワークを通して生徒と生徒、生徒と教授間のコミュニケーションを取ることは生徒の理解度が向上し、学びに繋がる。しかし、実践してみないことには、体験が経験になることはない。そこで、講義の中に課外活動を取り入れる。講義プログラムの中に課外活動を設け、高知くろしおキッズのサポート役として参加する。そうすることによって、くろしおキッズの問題点として挙げられている、人員不足の手助けに繋がり、さらに生徒自身の実践の場として活用することができる。計画プログラムを学生自身で考えさせることによって、講義態度や、取り組む姿勢が良い方向に変化させることができるのではないかと考える。

スポーツマネジメントのカリキュラムに一つの講義として、課外活動をプラスαで取り入れることで、将来スポーツトレーナーになりたい人やクラブチームのコーチになりたい人だけでなく、スポーツ関わる職業に就きたい人はその課外活動での経験が社会人になって活かすことができると考える。コーチングやコミュニケーション能力というものは、座学で学ぶだけでは身に付いたとは言えない。また、上記のことは、教職にも同じことを言えるのではないだろうか。本学で教職を履修している学生は4年次に実習という形で高校に身をおいて講義の仕方などを学ぶ機会はあるが、実際に教員というものを経験する場は実習期間しかない。スポーツマネジメントを専攻しながら教員を目指す学生には、スポーツを通して子どもたちに教育する機会を設けることができる。大学時代にスポーツの経験をしていたという実績があればスポーツ部活動への顧問に就任されることが多いだろう。そこで、高知くろしおキッズでスポーツを通して子どもたちに教えるという経験を積むことができると、学生にとっても大きなメリットになるのではないだろうか。以下の理由から、経済・マネジメント学群の全体の生徒を巻き込んだ仕組み作りとして、高知くろしおキッズの実践の場を通して、理解を深めていくべきである。

#### （2）インターンシップとして課外活動を行う

私は、3年次に高知県の梶原町で行われたインターンシッ

プに参加した。活動内容としては、梶原町の地域活性化について理解を深め、実際に高齢者施設や、子ども園、梶原学園に出向いて、実際に梶原に住んでいる人達との交流を通して、地域がどのように活性化させているのか自分自身が地域に入って体験するものであった。10日間のインターンシップを終え、子どもなら子ども、学生なら学生、高齢者なら高齢者の一つずつの組織に合った人との関わり方が大切であるのだと実感した。子どもには、子どもの目線に立って接すること。学生には、自分で考え発言することの大切さ、高齢者には無理のない適度な運動を取り入れることなど、人ひとりと接するにも、それぞれのやり方があるのだと学んだ。

特に、子ども園での交流を通して、子どもの成長は素晴らしいものだと感じた。例えば、外で遊ぶ時間の時に、年長組が竹馬の練習を行っていた時だ。どの子どもを見ても、「上手になりたい」の一心で先生手伝ってと申し出る子どもがほとんどだったのだ。できないから諦めるのではなく、できるまで挑戦するというチャレンジ精神がとても伝わってきた。そこで、私はもっと子どもたちにスポーツに関われる機会があれば、体を動かすことが楽しいことだと気づくことができる。インターンシップでの、子どもとの交流は私にとって、子どもの成長がどれだけの可能性があるのだろうかと強く考えさせられたものであった。だからこそ、子どもたちには無限の可能性が秘められていると感じている。一緒に遊んでいても、どこか緊張しているような、警戒しているような子どもがいた場合、1日では信頼を得るのが厳しいことがある。しかし、数日間一緒に過ごせる日を設けることができれば、そういった子の可能性さえも引き出せるのではないかな。

くろしおキッズのことに話を戻すが、高知くろしおキッズは教育プログラムの中に、夏季合宿がある。宿泊を伴い様々なプログラムを行う。そこで、その合宿にインターン生として参加し、サポート役として活動を行う。事前打ち合わせなどにも参加し、自分の意見を発言するという経験を積むことができる。インターンシップでは、決まった期間で継続的に学ぶことができ、スポーツマネジメント専攻の生徒からして

みれば、高知県のスポーツのあり方も学ぶことができるというメリットがある。さらに、インターンシップであれば、スポーツマネジメント専攻の人だけではなく、その他の一般学生で地域貢献に興味がある学生も、スポーツを通したインターンシップに参加することによって、地域貢献できると共に単位をもらえるという仕組みづくりができる。

このように、参加型・体験型の講義を行うことによって、聞くという受け身の講義ではなく、学生自身が自ら体験し、学ぶことが大切になってくるのではないだろうか。例えば現在、「レクリエーション論」という科目内では、ビデオ学習を取り入れ、実際に体を動かしながらレクリエーション活動を実践してその効果を理解する経験も取り入れているが、さらに課外活動を行うことで、実践の機会を入れることで講義の理解が深まるのではないかと考える。

### 第3章 考察

本研究を以下のようにまとめる。ヒアリングにより明らかとなったのは、高知くろしおキッズの手助けをする人の人員不足、高知県の東西の子どもの参加者が少ないことであった。そこで、部活動を行っている生徒や、スポーツマネジメントを専攻している生徒など、スポーツに興味・関心がある人に体験型・参加型の講義として行うことで、講義の質を向上させると共に、生徒自身の理解度を深めることができる。さらに、地域貢献に興味がある経済・マネジメント学群の生徒も巻き込み、学郡全体の活動として取り組んでいくべきであると考ええる。

私自身、以前から地域貢献に興味・関心があり、どのような仕組み作りができるのか考えたことがあった。地域で、世代間交流の一環として大運動会のようなイベントを計画したとしても、それはそれで地域貢献になりうるのかもしれない。しかし、子どもがスポーツに一生懸命取り組むことで、家族が応援してくれる。孫が頑張っていると思えば、祖父母だって応援してくれる。「自分の子どもがスポーツをしているから、ちょっと試合を観戦しにいこうかな」という軽い気持ちで外

にできる機会が増やすことができ、家族の枠を越え、同じチームの保護者、ライバルチームのとの交流を通して、たくさんの人で盛り上げていくことができるのであれば、地域貢献と言えるのではないだろうか。

図5 理想形態

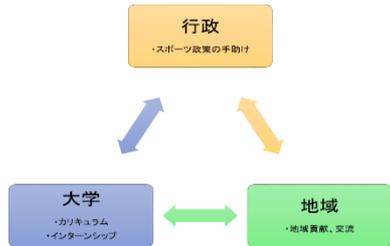


図5は、今後どのような政策を行っていくと良いかをまとめたものである。高知県の行政と、地域、大学の関係がさらに密接のものとなることができると期待される効果がある。それは、くろしおキッズの活動を通して交流した将来有望な子どもが本学に入学したいと考えてくれるかもしれない。地域交流を通して、年代問わずさまざまな人が本学のスポーツ選手を応援してくれるようになるかもしれない。高知県の行政と繋がることができたら、くろしおキッズを拡大し東西問わずたくさん子どもがスポーツを楽しむ機会ができるかもしれない。今挙げた例はたればになっているかもしれないが近い未来そうなることを願う。

## おわりに

スポーツは、老若男女問わず楽しむことができるものだ。「する」・「見る」・「支える」いろんな視点から触れ合うことができる。今回はスポーツをする本学の大学生徒として、今後どのような仕組みづくりを行っていけるかを提案した。

私自身、幼い頃からスポーツに触れ合ってきたたくさんの感動に出会うことができた。今までお世話になったたくさんの方々にとどのような形で恩返しができるのか考えることがあった。その根本的には、スポーツをもっとたくさんの人に広めたい。体を動かすことの楽しさをわかってもらいたいということがあったのだ。しかし、スポーツを通して感じること

のできることは楽しさだけではない。挫折をする苦しさ、悔しさ、自分ではどうしようもできない気持ちになりながらも、それでも挑戦し続ける。そこにスポーツを通して人間としての成長を感じられることができる。

本学から、また高知県からこれからの未来を担うアスリートが誕生し、高知県全体が活気溢れることを願って本研究のおわりとする。

## 謝辞

本研究を進めるにあたり、高知県文化生活スポーツ部の土居直也氏、福留美和子氏をはじめ、担当教員である生島淳准教授ほか、皆様から多大なご協力をいただきました。そして、互いに励ましあい高めあった研究室の仲間たちに向け、この場をかりて御礼申し上げます。

## 参考文献

- ・全日本こどもスポーツ連盟 チャレンジキッズ  
<https://jacs.or.jp/challenge-kids/>
- ・子どもの体力向上ホームページ  
[https://www.recreation.or.jp/kodomo/current/caus\\_e.html](https://www.recreation.or.jp/kodomo/current/caus_e.html)
- ・高知県庁 スポーツ課 HP  
<http://www.pref.kochi.lg.jp/soshiki/141801/>
- ・第2期高知県スポーツ推進計画 Ver. 1  
[第2章 本県スポーツの現状と課題]  
[http://www.pref.kochi.lg.jp/soshiki/141801/files/2018040300040/file\\_2018432111010\\_1.pdf](http://www.pref.kochi.lg.jp/soshiki/141801/files/2018040300040/file_2018432111010_1.pdf)
- ・高知工科大学 HP  
<https://www.kochi-tech.ac.jp/>
- ・社会貢献・地域貢献について考えよう  
<https://www.tfu.ac.jp/students/arn890000001rdp-att/navi09-04.pdf>